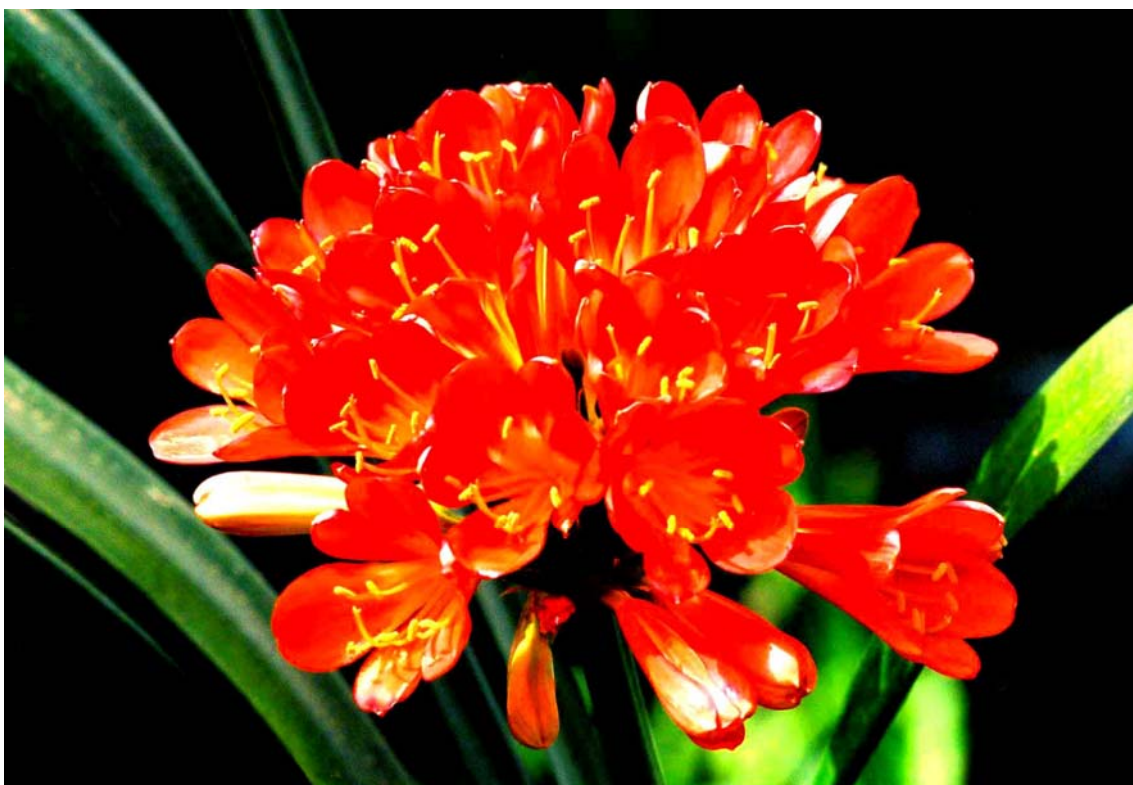


7) クンシラン=君子蘭

ランという名がついているもののランの仲間ではなく、ヒガンバナ科の多年草である。原産地は南アフリカで、鑑賞用として栽培されている。高さは40~50cmに及び、根は太い多肉質で、地際には鱗状の短縮茎があって、ここから長い舌状の葉を左右に束生する。花は朱赤色で、春から夏にかけて葉間に40~60cmの花茎を伸ばし、その頂に散形状でトランペット型の6弁花を20~30個つける。花は花茎4~6cmに達し、花底は白黄色または明るいオレンジ色で、花時は見事で花期も長い。学名は『*Clivia miniata*』で、属名は19世紀初頭に活躍した女流詩人クリビア公爵夫人の名に因み、種小辞は赤い花色を形容している。和名の由来は、元来クンシランは花が下垂して咲く『*Clivia nobilis*』を指していたが、やがて『*miniata*』種を総称してクンシランというようになり、『*nobilis*』を君子と翻訳したものが、『*miniata*』種に移行した後も、そのまま用いられたものと思われる。別称としては単にクリビアとか、ウケザキクンシランとかオオバナクンシランなどともいわれている。あえて受け咲きと呼ばれたのも、クリビア種と区別したためであろう。

クンシランがヨーロッパに伝わったのは1845年のことで、その後、明治の終わりごろにはヨーロッパを経由して日本にも渡来した。ベルギーやドイツ、オランダで品種改良が盛んに行なわれ、日本でも近年ダルマ系といわれる花卉の先がまるくて橙色の濃い品種が作り出されており、葉に美しい斑のはいる品種もある。

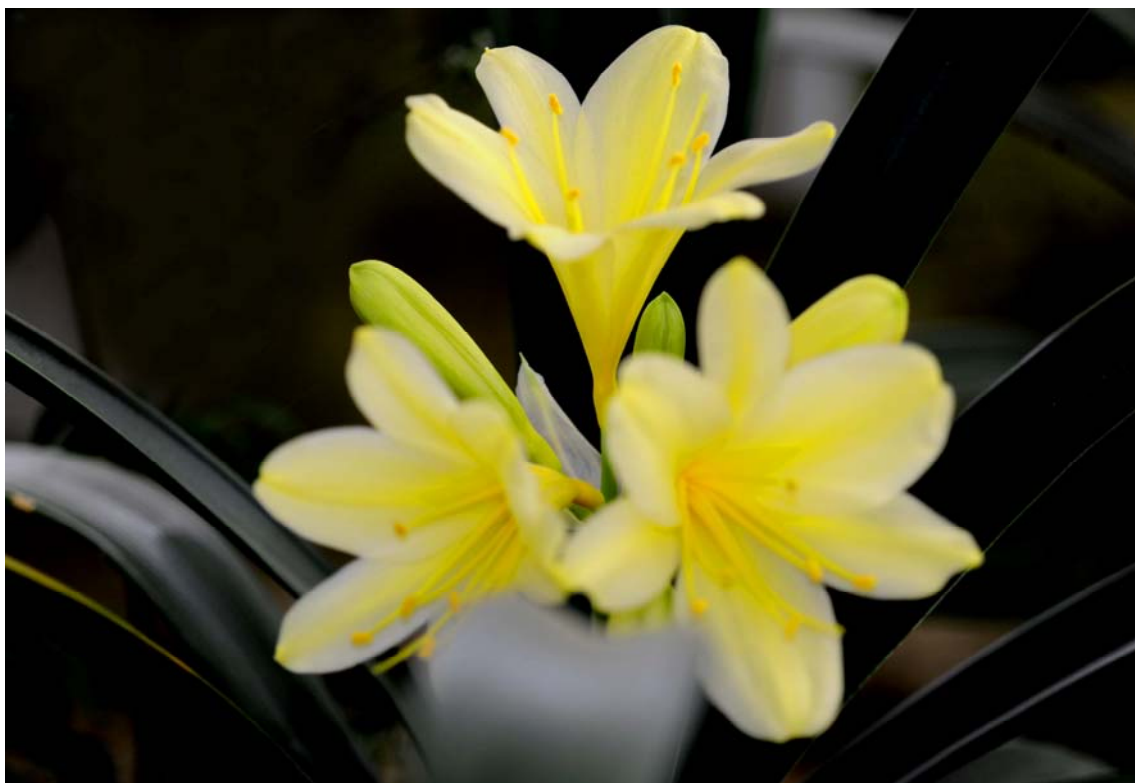
クンシランは半日影程度で十分に生育し開花する。冬は室内に取り込み5℃以下にならないように注意してあげれば、誰にでも育てることができる。生育の適温は15~20℃ぐらいで、12月頃から温度を高めにしてあげれば、冬のさなかに花を咲かせることも可能であり、このため冬に咲く花として取り扱われることが多い。また直射日光にさらしておくと、葉が日焼けを起こすことも少なくないので、要注意である。特に陽射しの強い季節は日陰になる場所で育てる方がうまく行く。繁殖は一般には実生もしくは株分けで、実生は花が咲くまでに5~6年ぐらいかかるので、一般的とは言えない。多くの株を作るのでなければ株分けをお勧めしたい。株が古くなると側芽を出して株立状になるので、これをうまく根をつけるように分割して、分けてあげればよい。用土は赤玉土と腐葉土を同量に混ぜ合せた混合土がよく、根が鉢内にぎっしりと回るようになったら鉢替えをしてあげるようにする。鉢替えの時期及び株分けの時期はともに5~6月頃がよく、もともと不耐寒性の植物であるから、寒さに向かっている時は避けるようにする。花屋さんには12月頃から店先に並び始める。しかしマンションのゴミ置き場には他のランなどと一緒に花が終わった株が、棄てられていることも多い。これを育ててあげるのもよいだろう。花は人間と同様に生きているものである。愛情を込めて育てれば、翌年も必ず花を咲かせてくれる。花が終わったからと言って、ゴミに出すことは何としても避けたいものである。



弁先に丸みのあるダルマ系品種は花色が濃く美しい。中には黄色や白色の花を咲かせるものもあり、ヒガンバナとの共通点も少なくない。



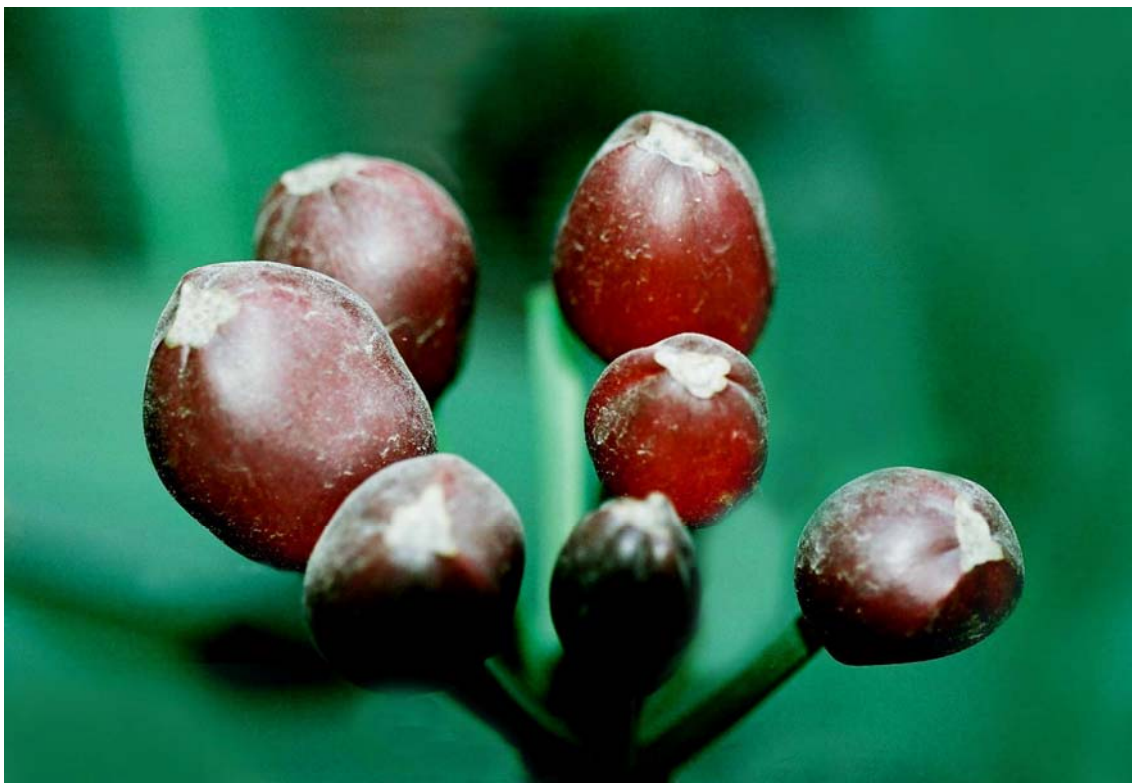
葉に美しい黄色の斑が入る品種もある。



黄花の君子欄である。この色のものにも葉に黄色の斑が入るものがある(埼玉県深谷市)。



黄花君子欄は比較的珍しくあまり見かけない(埼玉県深谷市)。



君子蘭の果実はこんな出来そこないのチョコレートみたいだが、もう少しきれいな赤い果実もある。中には数個の淡い黄色の種子がはいっている。



ムラサキクンシランも彼岸花の仲間で、梅雨の頃に花を咲かせる。

[目次に戻る](#)